

モードは語る

中野 香織

MoMAことニューヨーク近代美術館で、ファッションアイテムに焦点を当てる展覧会が開催されている(“Items: Is Fashion Modern?”)。同美術館がおこなうファッション展としては、1944年に建築家でもあったバーナード・ルドフスキーがキュレーションをおこなった“Are Clothes Modern?”以来、初めてのものとなる。今回の展覧会のタイトルも、44年版を踏まえたものだ。ルドフスキーには「みっともない身体」という怪著がある。人間はありのままの姿には満足できず、あらゆる加工により身体イメージを変えてきたという古今の具体例を紹介するこの本は、私をファッション研究に

ファッションの展覧会

今の米国物語る赤いシャツ

導いた決定的な一冊だった。

さて、ルドフスキーから73年を経た今展覧会においては、デザイナーではなく、20世紀から21世紀にかけて誕生したファッションアイテムに焦点が当てられる。ヘインズの白いTシャツ、リーバイスのジーンズ、コンバースのスニーカー、野球帽、スーツといった生活の必需品になったものから、シャネルのNo. 5(香水)、サンローランのタキシードルック、三宅一生のA-Poc(一枚の布)などの革命的なモード、そしてバンダナやヒジャブなど民族や宗教と密接に関わるアイテムにいたるまで、実に111アイテムが展示されるのだ。何らかの起源をもち、



展覧会は2018年1月28日
日までニューヨーク近代美術館で開催

時代の要請に応えるように「発明」されて人々の生活を変え、おそらく未来に受け継がれるであろう傑作である。

「キャパニック (Kaepernick)」と名のついた赤いシャツを見てはっとした。16年の8月、アメリカン・フットボール選手コリン・キャパニックは、人種差別がまかり通る国には敬意を払えないとして国歌斉唱時に起立しなかった。それに賛同する選手が、今、国歌斉唱時に続々とひざまずいている。この赤いシャツは現代の観客の心を揺さぶるとともに、100年後、トランプ大統領時代を語る貴重なアイテムとなるだろう。各アイテムがそんなふうな社会・経済・政治の物語を語り、ファッションの歴史は、時に愚かしくもひたむきな人間の歴史であることを思い知らされるのだ。

(服飾史家)